

第1回地域生活支援拠点運営会議（令和4年7月27日開催）

【議事】

- (1) 令和3年度の活動実績について
- (2) 今年度および次年度以降の取組みについて
- (3) 令和4年度の活動状況について ※以下、参照

【議事（3）】

今後の活動のなかで整理したい事項である次の3点について、実践場面での踏み込んだ提案や的確な助言の機会が確保されるために必要とされる視点やノウハウ等、拠点コーディネーターとしての機能強化、充実に向けた協議を行った。

- ・拠点コーディネーターとして、緊急受入れ以外の予防的関与、再発防止の取組みが求められるケース等への介入及び支援チームへの参画がスムーズになってきている一方、参画する意図やチーム内における役割の示し方等については試行錯誤が続いている。
- ・支援チーム内のそれぞれの役割が曖昧なまま整理されず、結果としてチームがうまく機能せずに支援に支障を来してしまう状況がある。
- ・拠点利用時に把握していた課題が再燃する等により、退所先等で不適應を起こす、またはその恐れがあることから再相談・再利用に至るケースが多い。

(主な意見について)

- ・緊急対応の場面で、拠点が持つネットワークを活用することで、支援チームに厚みを持たせてくれた事例があった。事例を通して、手を組める支援者をいかに増やしていくかが今後の課題。
- ・GH体験利用時に生活介護事業所の職員が橋渡し役として出向き、情報提供、支援方法の伝達等の実践を行っている事例もある等、今後のネットワーク形成のなかで、生活介護事業所との連携も重要になってくるのではないかと。なお、生活介護事業所でも、緊急等を見据えた対応について家族との面談を始めている。
- ・支援チームを形成するにあたり、「共同」について合意が取れない場合には、チームとしてパワーレスになりストレスを感じてしまう。こういった課題を自立協や研修会の場等で問題提起する等、その方が地域で暮らすために関わってもらい機関の巻き込み方等についても、拠点として一歩踏み込んだ対応が必要。
- ・緊急受入れ時に安心して過ごせる環境を設定することは容易では無いと、慣れた職員(日中サービス事業所の職員が短期入所事業所に訪問する等)が橋渡し役となり共に対応すること等により、本人及び受入れ施設の安心にも繋がる。こういった事例を実践報告会等で共有することで、面的整備の一助に出来ると良い。

